

むかしの高松

弥生時代中期のムラ～北山浦遺跡～

2009.8

第23号



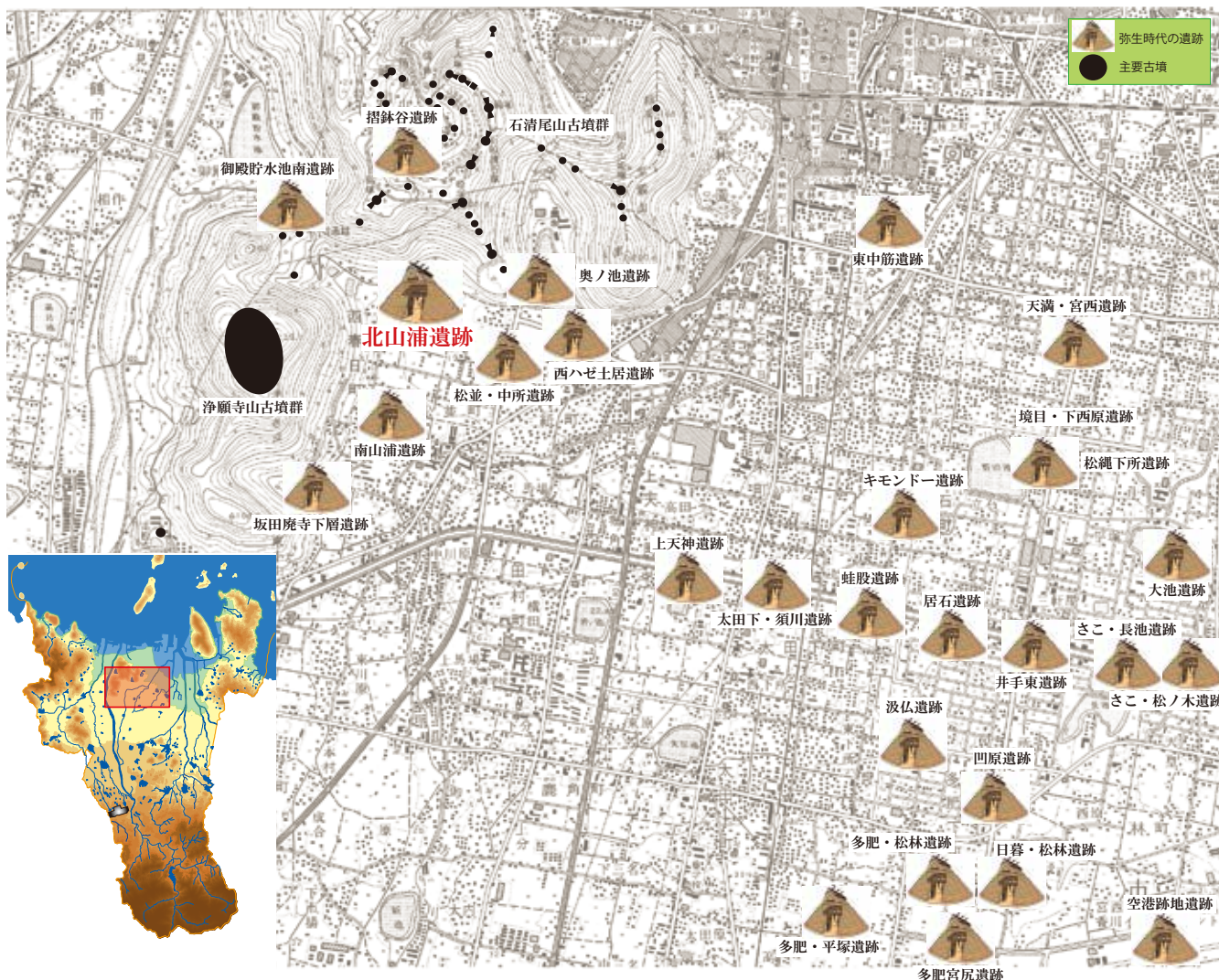
Introduction:

高松平野で発掘された弥生時代のムラと高松平野

高松平野の大部分は讃岐山脈より北に向かって流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成されています。

特に、香東川は高松平野の形成に最も影響を及ぼしており、江戸時代初めに河川改修されるまでは、石清尾山塊の南側を回りこんで、平野中央部を北東に流れるもう一本の流路がありました。さらにさかのぼれば香東川の流れた跡は様々なところで確認できます。発掘調査でも香東川の大小様々な支流が多数確認されています。今回紹介する北山浦遺跡でも、その一つと考えられる流路を検出しています。

高松平野では、これまで多くの弥生時代の集落跡や水田跡などが確認され、多数の土器や石器などが出土しており、弥生時代の暮らしの様子が明らかにされています。近年調査を行った北山浦遺跡の調査成果ををもちに弥生時代の高松にご案内いたします。



北山浦遺跡周辺の遺跡分布図

「国土地理院発行の2万5千分1地形図(高松南部)の一部を掲載」

北山浦遺跡のあらまし

確認した川跡



北山浦遺跡は西春日町北山浦に所在し、都市計画道路木太鬼無線街路事業に先立って発掘調査を行いました。遺跡のすぐ北側には鶴尾神社4号墳をはじめとする石清尾山古墳群が築造された石清尾山塊があります。

調査の結果、調査区の東側と西側で幅7mと14mの川跡を確認し、この二つの川に囲まれた少し高くなった土地に集落が営まれていたことが分かりました。川跡は、石清尾山から流れ出たものと、香東川の支流一つと考えられます。

集落には、4棟の円形^{たてあなじゅうきよあと}の堅穴住居跡、3棟の掘立柱建物跡^{ほったてばしらたてもあと たかゆかそうこあと}（高床倉庫跡）、10数基におよぶ方形の堅穴遺構を確認しました。これらの状況から、集落は調査地の北側（石清尾山側）に広がっていると考えられます。

住居跡やその周辺からは、土器や石器といった当時の人々が使用した生活道具が数多く出土したほか、石器製作の際に生じた石屑^{いしくず}や、土器などを焼成したときにできたと考えられる焼き締まった粘土の塊などが数多く出土していて、当時の人々の生活の様子をまざまざと伝えてくれます。

出土した弥生土器の形から、今から約2,000年以上前、弥生時代中頃（中期）に集落が営まれたことが明らかになりました。同じ頃、周辺にも松並・中所遺跡や西ハゼ・土居遺跡などの集落があったことが判明しています。

今回の調査では、弥生時代以外の遺構は確認できなかったため、弥生時代以降は、調査地周辺はもっぱら水田などの農地などとして利用されたようです。



北山浦遺跡から出土した土器

弥生人の住まい

北山浦遺跡では、約2,000年以上前の弥生時代中期の竪穴住居跡を4棟、掘立柱建物跡を3棟確認したほか、住居跡と考えられる隅丸方形の竪穴遺構を10数基確認し、当時のムラの様子が明らかになりました。

円形の竪穴住居跡



炭化材検出状況



竪穴住居跡完掘状況

円形の竪穴住居跡は直径約7～8mの規模で、中央に楕円形の中央土坑^{どこう}と呼ばれる炉跡があり、その周りに、6～7本の柱を配置する構造です。これは当時としては一般的な住まいの構造/規模です。柱を据えた穴には柱材も残っていました。このうちの1棟の竪穴住居跡の調査では、たくさんの炭や炭化した木材を確認できました。住居跡からは土器などの生活用品がほとんど出土しなかったことから、竪穴住居を火事で焼失したのではなく、建物の廃棄時に燃やした結果と考えられます。つまり、住まいを別の場所に構えるにあたり、暮らしていた住まいを焼却したものと考えられます。このような行為はすべての竪穴住居跡で認められるものではないので、住まいを変えなければならない何らかの特別な原因があったと推測できます。



残っていた柱

掘立柱建物跡 (高床倉庫)



掘立柱建物跡と残っていた柱の痕跡

方形の竪穴遺構

規模が長幅 3.5～5 m、短幅 3 m で、平面形態が隅丸方形に掘り込まれた遺構を 10 数基確認しました。土器や炉跡が見つかったことから、人々が生活の中で使ったことは分かりました。ただし、竪穴住居跡とは異なり、柱を据えた穴が確認できませんでした。そのため、どのような屋根があったのかが分かりません。また、構造も一様でなく、住居のようなものもあれば、倉庫や作業場のようなもの、後述しますが、土器などを焼成する機能などもあったと考えられます。

この方形の竪穴遺構に明確な評価を与えるためには、出土遺物や出土状況などの詳細な検討を加えなければなりません。その解明は、ムラの暮らしを復元する上で非常に重要な手がかりになるでしょう。



土器の出土状況



炉跡



土器の出土状況

土器づくり

弥生人は土器を作り、それを使って生活していたにも関わらず、その土器づくりの状況はあまりわかっていません。下の写真は中国の雲南地方において今も行われている土器づくりの様子を撮影したものです。発掘調査された北山浦遺跡の人々もよく似た作り方をしていたのでしょうか。北山浦遺跡での土器づくりの一端を示すと考えられる資料を得ることができました。



中国雲南地方における土器づくり（岡山理科大学提供）

素地

土器づくりをする上で、重要な工程に素地作りというものがあります。これは、土器を作るための粘土を準備する工程で、この工程をしっかり行わないと土器を焼成した際に割れてしまいます。この粘土の素地を作る場合に、必要なものが混和材と呼ばれるもので、土器を焼成した時に割れにくくするために粘土の中に混ぜる砂礫です。

高松市内で発見される弥生土器には、^{かくせんせき}角閃石という黒々と光るガラス質の砂礫を粘土の中に混和材として多量に混ぜて素地を作るという特徴があります。特に、その角閃石を混ぜたもしくは混ぜた粘土で土器を作っていたのが北山浦遺跡がある石清尾山南麓周辺の集落と考えられています。

このような素地作りの際に使われたであろう角閃石を多量に含む斑レイ岩が、北山浦遺跡の堅穴住居跡の中から見つかりました。これは土器づくりの重要な工程である素地づくりにおいて、この斑レイ岩を砕いて粘土の中に混ぜていたことを示す重要な証拠です。



角閃石を多量に含む斑レイ岩

焼成

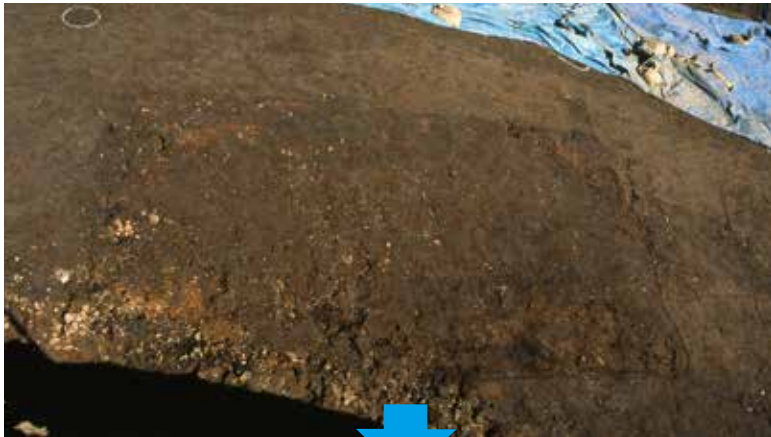
土器づくりの最終工程である焼成の工程は痕跡として残らないため、その状況は詳しくは分かっていません。そのような中で、北山浦遺跡ではムラの中で土器焼きを行ったと考えられる痕跡や証拠が見つかりました。

その一つが調査区のあちこちから見つかった炭化材、焼けた粘土の塊です。粘土の塊は大小様々で、写真のような大型の粘土の塊も出土しました。この他にも、焼いた際によく起こる円形に剥落がある土器や、その剥落によって生じた円形の破片などを多数確認しました。



ねんどかい
巨大な粘土塊

土器を焼いた遺構？



左の写真は土器を焼成したと考えられる方形の竪穴遺構の調査状況を順番に並べたものです。

①調査を行っている時、黒色に変色した土が四角い範囲に広がっている状況が見えてきました。



②この黒い土を掘り下げていくと、赤く焼けた土や焼き締まった粘土、炭化材などが広がっている状況を確認しました。



③さらに厚く堆積していた焼土や炭化材などを取り除いていくと、さらに固く焼き締まった粘土塊がこの遺構の半分を覆っている状況が確認できました。そこから土器も一緒に出てきました。



④このような状況から大規模に火を用いた痕跡であることは間違いないと考えられます。さらに、土器を焼成した可能性が高い遺構では粘土の塊の中に藁状の圧痕がよく残っていますが、この遺構からも多数出土しました。

焼成方法等、検討すべきことはまだ多くありますが、今後の詳細な調査研究が期待できます。

北山浦遺跡からは、住居跡をはじめとして、いろいろな機能や形態をもった石器が多くに出土しました。主なものは、石鏃、石錐、石庖丁、石斧などです。石鏃は、その形態も様々で、狩猟に使われた矢の多様さを物語っています。

このような製品以外にも、製作に失敗して捨てられたもの、製作時に生じた石屑など、石器作りの工程を知るための手がかりとなる資料も多量に出土しました。基本的に、素材を調達してきて、ムラの中で石器を製作していたようです。

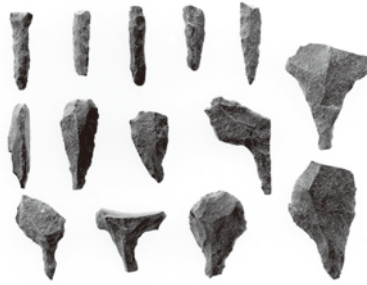
香川県の場合、石器に使われた石材は金山産と考えられるサヌカイトがほとんどですが、その一方で、砂岩などの他の石材、さらには他の地域から持ち込まれたと考えられる結晶片岩などの石材もいくつか出土しています。様々な石材の状況から石器製作をするための物資の調達や交換の様子をうかがい知ることができます。



せきほ
石斧



せきぞく
石鏃



せきすい
石錐



さまざまな石材

編集後記

調査中、さらには現地説明会では多くの方々の御理解と御協力、さらには御参加をいただき、すべてを無事に終えることができました。改めて感謝いたします。

北山浦遺跡の発掘調査の実施によって、弥生時代中期のムラの景観を考えるための重要な資料を得ることができました。今後、遺跡を詳細に



現地説明会での一コマ

検討し、歴史の中に埋め込んでいく作業を行っていく予定です。資料の重要性を理解し、弥生時代の人々がどのような住まいに住み、どのような道具を使い、どのように生活していたのかを明らかにしていきたいと改めて切に思いました。本誌作成にあたり、岡山理科大学所蔵の写真資料の掲載を快諾していただきました。岡山理科大学および徳澤啓一氏には厚く御礼申し上げます。(M. W.)

むかしの高松 第23号

2009. 8. 10.

編集・発行

高松市教育委員会

教育部 文化財課

高松市番町一丁目8番15号

Tel : 087-839-2660

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/886.html>